

ノイエスだより

ノイエス朝日
(朝日印刷工業株式会社)群馬県前橋市元総社町73-5
TEL 027-255-3434
FAX 027-255-3435
https://www.neues-asahi.jpCommunication House
NEUES
ASAHI

今年の大河ドラマは紫式部をモデルにしているので、平安時代の描写を楽しみに見えています。数年前の平清盛では、時代考証を大切にすぎたせいかあまりにも画面（景色や衣装）が汚いとクレームが入ったようです。ここ何年かの時代劇ドラマは、最新の時代考証を大切にすぎればそういったクレームが入り、視聴者にわかりやすいドラマを目指して現代語をたくさん使えばそれはそれでクレーム……。モノ作りはどの世界も大変だと思えます。でも賛否両論ありながらも、歴史を見直したり、時代考証に基づいてアップデートされていく調度品や食事や衣装を大変興味深いと思いつつ視聴しています。

先日、絵本の原画展を見ました。「スーホの白い馬」の原画があり（厳密には原画の精巧な複製だそうですが）、子どもの頃に国語の教科書で見て以来もう四十年近く時が経ったとは思えない感動がありました。そして、若い人や小学二年生の私の娘とも同じ絵本について話ができることがとっても面白かったです。かつての大人たちが子どものために選んだ物語は、時代は変わっても今でも同じような感動と深い印象を子どもたちに残しているということでしょう。でも調べてみると、教科書を出版している四社のうち三社はもうこの話を載せていないようです。前橋の国語の教科書は一番普及している出版社のものなので、変革をアピールする体制ではなく長く同じ物語が使われているのかもしれないし、難しい話や辛い話は載せずらくなっているのかもしれない。スーホの話も「馬が楽器になる描写が耐えられない」という声があったようです。でも、胸をえぐられるような悲しみや辛い物語との出会いが、読む子どもを強く成長させてくれる時もあると思うのです。違う時代や文化や価値観との出会い、それを想像する力が必要だと思うのです。もうそんな苦労や心労を子どもたちが想像する必要が無いほど世の中は平和なのでしょう。文化や地位の違いが起す悲劇に寄り添いながら話し合うというのは教える大人や教師にとってはとっても大変ですが、それを避けてはいけません。

大河ドラマの話に戻りますが、清少納言を演じる俳優が彼女のことを「聡明で勝気、あけすけだけドウィットに富んだ辛口プログラムの第一人者、という印象」と言っていました。同感です。生活の中でふと見つける「素敵！かわいい！」と思う瞬間を、千年前の人と共感できるのも楽しいことです。「二歳くらいの赤ちゃんが這ってくる途中でホコリみたいなのを見つけてかわいい手でつまんで自慢そうに見せる様子なんて超かわいいよねー」（橋本意訳）とか、時を超えたほっこりした幸せが伝わってきます。過去を学ぶことも、未来を創造することも、まずは共感力が大事だと思う一月でした。

(橋本)

ノイエス朝日〈展覧会〉のご案内

ノイエスふる本市

〈企画〉

会期 二月十日(土)～十八日(日)

午前十時～午後五時(最終日は午後三時終了)

毎年恒例のふる本市を開催します。宗教・神書・哲学・文学・語学・歴史・地誌・経済・社会学・医学・美術など専門書を中心に約四〇〇冊を用意しています。

―蘇った源氏物語 卓越した職人の技―

江戸版画の世界

会期 二月二十四日(土)～三月三日(日)

午前十時～午後五時

江戸時代後期に庶民に親しまれた合巻の「偽紫田舎源氏」をメインに、寺子屋で使われた教科書である「実語教」「童子教」などを展示予定です。合巻は表紙に多色版画が使われ、上下巻で一つの絵のように呼応している様子を額装したもののや、刷が違ふことによる色の違いや紙の比較など様々な視点からご覧いただけます。そして江戸時代の市井の人々が読み物を楽しむことができたことの原点となる寺子屋教育を考察する資料として「実語教」などを並べます。

(前橋在住のコレクターと展示実行委員による企画・展示となります。)



綿貫哲雄作陶展

〈企画〉

三月九日(土)～十七日(日)

午前十時～午後五時(最終日は午後四時終了)

ニットソーイング真

三月十九日(火)～二十一日(木)

午前十時～午後五時

田嶋祥行展 ―野・生・層―

〈企画〉

三月二十三日(土)～三十一日(日)

午前十時～午後五時(最終日は午後四時終了)

※次号のノイエスだよりで詳しくご案内いたします

版画三人展

―モノクロームに魅せられて―

〈企画〉

鈴木康弘・多胡宏・中林三恵

四月六日(土)～十四日(日)

午前十時～午後五時(最終日は午後四時終了)

※次号のノイエスだよりで詳しくご案内いたします

『修紫田舎源氏』(にせむらさきいなかげんじ)は、柳亭種彦の未完の長編合巻。挿絵は歌川国貞。文政十二年(一八二九年)・天保十三年(一八四二年)刊。江戸時代最大のベストセラーとなり、種彦の代表作となった。十四年にわたって書き継がれたが、作者の筆禍と死去により、第三十八編(二五二冊)までに終わった。『源氏物語』を通俗的に翻案した小説で、「修」は「似せ」「偽」の意。

紫式部の『源氏物語』を下敷きにして、時代を平安時代から室町時代へ移している。将軍足利義政の妾腹の子・光氏が、将軍位を狙う山名宗全を抑えるため、光源氏の好色遍歴を装いながら、宗全が盗み隠していた足利氏の重宝類を次第に取り戻す一方、須磨・明石に流寓して西国の山名勢を牽制し、宗全一味をはかりごとで滅ぼした後、京都に戻り、将軍後見役となって栄華を極める。

前半部分は、光源氏にあたる足利光氏が山名宗全の隠謀を暴く推理小説仕立てで、22編以降は『源氏物語』に忠実な翻案となっている。参考・WIKIPEDIA